3次元的微小撹乱に対する Hill の球形渦の応答

電機大理工 タシプラト・ロズ (Tashpulat Rozi) 電機大理工 福湯 章夫 (Akio Fukuyu)

1 はじめに

非圧縮性,非粘性流体の渦運動として Hill の球形渦が知られて いる. Hill の渦に微小撹乱を与えた時の応答については,軸対称 撹乱についての Moffatt-Moore の解析 [1] がある. この文献によ ると,初期に与えた撹乱によって渦領域が長円形に変形すると, 後部淀み点付近から渦度を持つ流体が針のような形を形成しな がら外部の渦無しの流れの中へ流出する. 彼らは,これを spike と呼んだ. 初期に偏円形にすると,後部淀み点付近から渦無しの 流体が渦領域の内部へ流入していく.本論文では一般の3次元的 な微小撹乱を与えた時の Hill の球形渦の応答を調べる.

2 発展方程式について

渦のの中心を原点 O とする流れの中に固定した球面極座標 (r, θ, ϕ) における Hill の球形渦の速度場 $\mathbf{u}_H = (u_H, v_H, 0)$ は,

$$u_H = \begin{cases} U\left(1 - \frac{a^3}{r^3}\right)\cos\theta \equiv u_H^+, & (r > a) \\ -\frac{3}{2}U\left(1 - \frac{r^2}{a^2}\right)\cos\theta \equiv u_H^-, & (r < a) \end{cases}$$

(2.1)

$$v_{H} = \begin{cases} -U\left(1 + \frac{a^{3}}{2r^{3}}\right)\sin\theta \equiv v_{H}^{+}, \ (r > a) \\ \frac{3}{2}U\left(1 - \frac{2r^{2}}{a^{2}}\right)\sin\theta \equiv v_{H}^{-}, \ (r < a) \end{cases}$$
(2.2)

によって与えられる.ここで,aは球形渦の半径を表わす,Uは 対称軸に対して平行に流れる遠方での一様流の速度を表している.ある初期時刻 t = 0の瞬間に, Hill の球形渦の表面 S に 3 次元的な微小撹乱が加えられたとする.以後の S(t) (t > 0) を ϵ を微小パラメータとして,

$$r = a(1 + \epsilon h(\theta, \phi, t)) \tag{2.3}$$

で表す.更に, 渦表面 S(t) の外部領域を Ω_+ , 内部領域を Ω_- , として, t > 0 における速度場 **u** を

$$\mathbf{u}(r,\theta,\phi,t) = \mathbf{u}_H(r,\theta) + \epsilon \mathbf{u}^{\pm}(r,\theta,\phi,t) \quad \text{in } \Omega_{\pm}$$
(2.4)

の形に与える.ここに, u[±] は撹乱の速度を表す.

以後,全ての物理量は球形渦の半径a,無限遠方での一様流の 速度U,流体の密度 ρ によって次のように無次元化されているも のとする.

$$\frac{U}{a}t \to t, \quad \frac{r}{a} \to r, \quad \frac{\mathbf{u}}{U} \to \mathbf{u}, \quad \frac{p}{\rho U^2} \to p \quad etc.$$
 (2.5)

3 外部領域 Ω_+ における流れ

Hill の渦の摂動は, 渦領域の外部から渦無しの微小撹乱を加え たことによるものと仮定する. それ故, 外部領域 Ω_+ における乱 された速度 \mathbf{u}^+ はポテンシャル流である. 即ち, \mathbf{u}^+ は, 速度ポ テンシャル $\Phi(r, \theta, \phi, t)$ を用いて,

$$\mathbf{u}^+ = \mathrm{grad}\Phi\tag{3.6}$$

で与えられる.

極座標系では $\Phi(r, \theta, \phi, t)$ は球面調和関数を用いて次のように 表される.

$$\Phi(r,\theta,\phi,t) = \sum_{n=1}^{\infty} \sum_{m=0}^{n} \left(A_{nm}^{e}(t)Y_{nm}^{e}(\theta,\phi) + A_{nm}^{o}(t)Y_{nm}^{o}(\theta,\phi)\right) \left(\frac{1}{r}\right)^{n+1}$$
(3.7)

$$\Box \subset \mathcal{C},$$

 $Y^e_{nm}(\theta,\phi) = \cos m\phi P^m_n(z), \ Y^o_{nm}(\theta,\phi) = \sin m\phi P^m_n(z), \ z = \cos \theta.$

であり、 $P_n^m(z)$ は Legendre の倍関数である.以下に、(3.7)式右 辺に含まれる方位角の波数 *m* を方位数と呼ぶことにする. 従って、領域 Ω_+ における乱された速度 $\mathbf{u}^+ = (u^+, v^+, w^+)$ は、

$$\begin{cases} u^{+} = \frac{\partial \Phi}{\partial r} = -\sum_{n=1}^{\infty} \sum_{m=0}^{n} (n+1)A_{nm}Y_{nm} \left(\frac{1}{r}\right)^{n+2} \\ v^{+} = \frac{1}{r} \frac{\partial \Phi}{\partial \theta} = \sum_{n=1}^{\infty} \sum_{m=0}^{n} A_{nm} \frac{\partial Y_{nm}}{\partial \theta} \left(\frac{1}{r}\right)^{n+2} \\ w^{+} = \frac{1}{r\sin\theta} \frac{\partial \Phi}{\partial \phi} = \sum_{n=1}^{\infty} \sum_{m=0}^{n} \frac{A_{nm}}{\sin\theta} \frac{\partial Y_{nm}}{\partial \phi} \left(\frac{1}{r}\right)^{n+2} \end{cases}$$
(3.8)

で与えられる.ここで簡単のために $A_{nm}(t)Y_{nm}(\theta,\phi)$ で、 $A^e_{nm}(t)Y^e_{nm}(\theta,\phi) + A^o_{nm}(t)Y^o_{nm}(\theta,\phi)$

を表わすことにする.

4 内部領域 Ω_ における流れ

軸対称的な変形の場合には、領域 Ω_{-} での乱された速度 \mathbf{u}^{-} は 渦無しの流れである.従って、外部領域と同様に速度ポテンシャ ルが存在するが、一般に、3次元的(即ち、非軸対称)な変形の 場合には、 \mathbf{u}^{-} は渦運度となることが考えられる.それ故、内部 領域 Ω_ における流れを知るためには, 3 次元 Euler 方程式を解 く必要がある.

そこで、領域 Ω_- における圧力 $p(r, \theta, \phi, t)$ を、 $p_H^-(r, \theta)$ を Hill の球形渦に対する圧力分布として、

$$p(r,\theta,\phi,t) = p_H^-(r,\theta) + \epsilon p^-(r,\theta,\phi,t)$$
(4.9)

の形に置く.ここに, p^- は撹乱に対応する圧力である. ここで, 領域 Ω_- における流れの場,

 $\mathbf{u}(r,\theta,\phi,t) = \mathbf{u}_{H}^{-}(r,\theta) + \epsilon \mathbf{u}^{-}(r,\theta,\phi,t), \quad p(r,\theta,\phi,t) = p_{H}^{-}(r,\theta) + \epsilon p^{-}(r,\theta,\phi,t)$ (4.10)

を Euler の運動方程式

$$\frac{D\mathbf{u}}{Dt} = -\frac{1}{\rho} \text{grad } \mathbf{p}$$

に代入し、 ϵ について 1 次のオーダーの量を取ると、 $\frac{\partial u^{-}}{\partial t} = -3r\cos\theta u^{-} + \frac{3}{2r}(1 - 3r^{2})\sin\theta v^{-} + \frac{3}{2}(1 - r^{2})\cos\theta\frac{\partial u^{-}}{\partial r}$ $-\frac{3}{2r}(1 - 2r^{2})\sin\theta\frac{\partial u^{-}}{\partial \theta} - \frac{\partial p^{-}}{\partial r}$ (4.11)

$$\frac{\partial v^{-}}{\partial t} = -\frac{3}{2r} \sin \theta u^{-} + \frac{3r}{2} \cos \theta v^{-} + \frac{3}{2} (1 - r^{2}) \cos \theta \frac{\partial v^{-}}{\partial r}
-\frac{3}{2r} (1 - r^{2}) \sin \theta \frac{\partial v^{-}}{\partial \theta} - \frac{1}{r} \frac{\partial p^{-}}{\partial \theta}$$

$$\frac{\partial w^{-}}{\partial t} = \frac{3r}{2} \cos \theta w^{-} + \frac{3}{2} (1 - r^{2}) \cos \theta \frac{\partial w^{-}}{\partial r} - \frac{3}{2r} (1 - 2r^{2}) \sin \theta \frac{\partial w^{-}}{\partial \theta}
-\frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial p^{-}}{\partial \phi}$$
(4.12)
(4.13)

を得る. 但し, $\mathbf{u}^- = (u^-, v^-, w^-)$ である. また, 連続方程式は, $\frac{\partial u^-}{\partial r} + \frac{2u}{r} + \frac{1}{r} \frac{\partial v^-}{\partial \theta} + \frac{\cot \theta v^-}{r} + \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial w^-}{\partial \theta} = 0 \qquad (4.14)$ となる. ここで, (4.14) 式を考慮して, (4.11) ~ (4.13) 式から, $\frac{\partial u^-}{\partial t}, \frac{\partial v^-}{\partial t}, \frac{\partial w^-}{\partial t}$ なる項を消去することにより, 撹乱圧力に対す

る方程式が,次のように得られる. $\frac{1}{r^2}\frac{\partial}{\partial r}\left(r^2\frac{\partial p^-}{\partial r}\right) + \frac{1}{r^2\sin\theta}\frac{\partial}{\partial\theta}\left(\sin\theta\frac{\partial p^-}{\partial\theta}\right) + \frac{1}{r^2\sin^2\theta}\frac{\partial^2 p^-}{\partial\phi^2} = F(r,\theta,\phi) \quad (4.15)$ ここで, $F(r,\theta,\phi)$ は,

$$F(r,\theta,\phi) = -12\sin\theta v^{-} - 9r\cos\theta\frac{\partial u^{-}}{\partial r} - 3r\sin\theta\frac{\partial v^{-}}{\partial r} + 12\sin\theta\frac{\partial u^{-}}{\partial \theta} \quad (4.16)$$

である. 従って, u^-, v^-, w^-, p^- は (4.11) ~ (4.13) 式, 及び, (4.15) 式を同時に満足するように求めなくてはならない.

ここで、 \mathbf{u}^+ に倣って、 u^-, v^-, w^- および p^- についても、 Ω_- で、球面調和関数 $Y_{nm}(\theta, \phi)$ を用いて、次のように展開する.

$$u^{-}(r,\theta,\phi,t) = \sum_{n=1}^{\infty} \sum_{m=0}^{n} u_{nm}(r,t) Y_{nm}(\theta,\phi), \qquad (4.17)$$

$$v^{-}(r,\theta,\phi,t) = \sum_{n=1}^{\infty} \sum_{m=0}^{n} v_{nm}(r,t) \frac{\partial Y_{nm}(\theta,\phi)}{\partial \theta}, \qquad (4.18)$$

$$w^{-}(r,\theta,\phi,t) = \sum_{n=1}^{\infty} \sum_{m=0}^{n} \frac{w_{nm}(r,t)}{\sin\theta} \frac{\partial Y_{nm}(\theta,\phi)}{\partial\phi} \left(\frac{1}{r}\right)^{n+2}, \qquad (4.19)$$

$$p^{-}(r,\theta,\phi,t) = \sum_{n=1}^{\infty} \sum_{m=0}^{n} p_{nm}(r,t) Y_{nm}(\theta,\phi), \qquad (4.20)$$

ここでも上のように $u_{nm}(r,t)Y_{nm}(\theta,\phi)$ を次のような式で表すことにする.

$$u_{nm}(r,t)Y_{nm}(\theta,\phi) = u^e_{nm}(r,t)Y^e_{nm}(\theta,\phi) + u^o_{nm}(r,t)Y^o_{nm}(\theta,\phi) \quad etc.$$

(4.17), (4.18), (4.19), (4.20) 式を (4.11), (4.12), (4.13) 式へ代入し, 得られた各々の方程式の両辺に $\cos m\phi$ あるいは $\sin m\phi$ を掛け て ϕ について $0 \sim 2\pi$ まで積分すると, $\partial u^e_{nm}/\partial t$ に対する方程 式が得る (詳細については論文 [2] 参照).

ここで、 $\partial u_{nm}^o/\partial t$ に対しても、 $\partial u_{nm}^e/\partial t$ と同じ形の方程式を満たすことに注意する.

次に、このようにして得られた各方程式に、Legendreの倍関数についての漸化式:

$$zP_n^m(z) = \frac{n-m+1}{2n+1}P_{n+1}^m(z) + \frac{n+m}{2n+1}P_{n-1}^m(z),$$

$$(1-z^2)\frac{dP_n^m(z)}{dz} = -\frac{n(n-m+1)}{2n+1}P_{n+1}^m(z) + \frac{(n+1)(n+m)}{2n+1}P_{n-1}^m(z).$$

を代入し、各々方程式の両辺に $P_n^m(z)$ を掛け、Legendre の倍関数の直交性に注意して、z について $-1 \sim 1$ まで、それぞれ項別積分すれば、

$$\begin{array}{ll} \frac{\partial u_n}{\partial t} &= -3r \left(\frac{n-m}{2n-1} u_{n-1} + \frac{n+m+1}{2n+3} u_{n+1} \right) \\ &\quad -\frac{3}{2} \left(\frac{1}{r} - 2r \right) \left\{ \frac{(n-1)(n-m)}{2n-1} u_{n-1} - \frac{(n+2)(n+m+1)}{2n+3} u_{n+1} \right\} \\ &\quad +\frac{3}{2} \left(\frac{1}{r} - 3r \right) \left\{ \frac{(n-1)(n-m)}{2n-1} v_{n-1} - \frac{(n+2)(n+m+1)}{2n+3} v_{n+1} \right\} \\ &\quad +\frac{3}{2} (1-r^2) \left(\frac{n-m}{2n-1} \frac{\partial u_{n-1}}{\partial r} + \frac{n+m+1}{2n+3} \frac{\partial u_{n+1}}{\partial r} \right) - \frac{\partial p_n}{\partial r}. \quad (4.21) \end{array}$$

$$\left(\frac{v_{n+1}}{r} + \frac{\partial v_{n+1}}{\partial r}\right) + \frac{1}{r} \frac{(n-2)(n-m-1)(2n+1)}{(n+1)(n+m)(2n-3)} p_{n-2} - \frac{1}{r} p_n,$$
(4.22)

$$\frac{\partial w_n}{\partial t} = \frac{3}{2} r \left(\frac{n-m}{2n-1} w_{n-1} + \frac{n+m+1}{2n+3} w_{n+1} \right)
- \frac{3}{2} \left(\frac{1}{r} - 2r \right) \left\{ \frac{(n-2)(n-m)}{2n-1} w_{n-1} - \frac{(n+3)(n+m+1)}{2n+3} w_{n+1} \right\}
+ \frac{3}{2} (1-r^2) \left(\frac{n-m}{2n-1} \frac{\partial w_{n-1}}{\partial r} + \frac{n+m+1}{2n+3} \frac{\partial w_{n+1}}{\partial r} \right) - \frac{1}{r} p_n. \quad (4.23)$$

のように,任意の方位数 *m* を固定する毎に, $n \ge m$ となる全 ての *n* に対して成り立つ各展開係数の時間発展に対する方程式 系として導かれる.従って,これらの方程式系は,任意の方位数 *m* については閉じており, u_{nm}^{e} , u_{nm}^{o} は独立に同じ方程式を満た すので,これ以後,簡単なために, u_{nm}^{e} , u_{nm}^{o} 等の代わりに u_{n} 等 を用いることにした.ここで,(4.22)については,この式の右辺 に $\partial v_{n-2}/\partial t$ なる項を含んでいるために,この方程式は任意の方 位数 *m* に対して, $n \ge m+1$ なる *n* について成り立つことに注 意する.そこで, $\partial v_{m}/\partial t$ に対する方程式を得るために,論文[2] の (2.20)式の両辺を *z* について $-1 \sim z$ まで積分する.この式 の両辺に $P_{m}^{m}(z)$ を掛けて *z* について $-1 \sim 1$ まで積分すること により,

$$\frac{\partial v_m}{\partial t} = \frac{3}{2} \left(\frac{1}{r} - 6r \right) \sum_{n=m}^{\infty} \alpha_n^m u_n + \frac{3}{2} (1 - r^2) \sum_{n=m}^{\infty} \left(\frac{2m+1}{2m+3} \delta_{n,m+1} - \alpha_n^m \right) \\
\left(\frac{v_n}{r} + \frac{\partial v_n}{\partial r} \right) - \frac{3}{2} \left(\frac{1}{r} - 2r \right) \sum_{n=m}^{\infty} \{n(n+1)\alpha_n^m - m^2\beta_n^m\} v_n \\
- \frac{p_m}{r}$$
(4.24)

のように得られる.ここで、 $\delta_{n,m}$ は Kronecker のデルタであり、係数 α_n^m, β_n^m は、

$$\alpha_n^m = \frac{(2m+1)}{2(2m)!} \int_{-1}^1 P_m^m(z) \int_{-1}^z P_n^m(x) dx dz \qquad (4.25)$$

$$\beta_n^m = \frac{(2m+1)}{2(2m)!} \int_{-1}^1 P_m^m(z) \int_{-1}^z \frac{P_n^m(x)}{1-x^2} dx dz \qquad (4.26)$$

である.

次に, $p_n(r,t)$ に対する方程式は, (4.15) 式に (4.20) 式を代入し, 上と同様な操作を施すことによって,

$$\frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dp_n}{dr} \right) - \frac{n(n+1)}{r^2} p_n = f_n(r), \quad (0 < r < 1)$$
(4.27)

が得られる.

$$\begin{aligned} \mathcal{Z} \subset \mathfrak{C}, \quad f_n(r) \quad & \text{lt}, \\ f_n(r) \quad = \quad \frac{(n-1)(n-m)}{2n-1} \left(12u_{n-1} - 12v_{n-1} - 3r\frac{\partial v_{n-1}}{\partial r} \right) \\ \quad - \frac{(n+2)(n+m+1)}{2n+3} \left(12u_{n+1} - 12v_{n+1} - 3r\frac{\partial v_{n+1}}{\partial r} \right) \\ \quad - \frac{9(n+m+1)}{2n+3} r\frac{\partial u_{n+1}}{\partial r}. \end{aligned}$$
(4.28)

である. (4.27) 式の一般解を求めると,

$$p_n(r) = ar^n + br^{-(n+1)} + \frac{r^n}{2n+1} \int_1^r r^{-(n-1)} f_n(r) dr - \frac{r^{-(n+1)}}{2n+1} \int_0^r r^{n+2} f_n(r) dr$$
(4.29)

となる. ここで, a と b は任意定数である.

5 流れ場の連続性

3次元的な微小撹乱を加えられたことによって歪められた Hill の渦の表面 S(t) の内外の速度分布は,連続的につながらなくては ならない.内部領域 Ω_- における乱された速度 $\mathbf{u}^- = (u^-, v^-, w^-)$ に対する境界条件は,この S(t) における流れの連続性から得ら れる.

撹乱を加えられた後の渦の流れの場は,

 $\mathbf{u} = \mathbf{u}_{H} + \epsilon \mathbf{u}^{\pm}$ and $p = p_{H}^{\pm} + \epsilon p^{\pm}$ in Ω_{\pm} (5.30) として与える.ここに, $p_{H}^{\pm} \geq p_{H}^{-}$ は, それぞれ本来の Hill 球 形渦の内部, 外部の圧力分布を表しており, それらは,

$$p_{H}^{+} = p_{0} - \frac{1}{2} \left\{ \left(1 - \frac{1}{r^{3}} \right)^{2} + \frac{3}{r^{3}} \left(1 - \frac{1}{4r^{3}} \right) \sin^{2} \theta \right\}$$
(5.31)

$$\bar{p}_{H} = p_{0} - \frac{9}{8} \{ \left(1 - r^{2}\right)^{2} + \left(3 - 2r^{2}\right)r^{2}\sin^{2}\theta \}$$
(5.32)

で与えられる.ここで、 p_0 は定数である. 速度場 $\mathbf{u} = (u, v, w)$ について、u の連続性から ϵ について 1 次 のオーダーの量をとると、

 $u^{-}(1,\theta,\phi,t) = u^{+}(1,\theta,\phi,t).$ (5.33)

故に,

$$u_n(1,t) = -(n+1)A_n(t).$$
(5.34)

同様に、 vの連続性から、

$$h(\theta, \phi, t) = \frac{2}{15\sin\theta} \left(v^{-}(1, \theta, \phi, t) - v^{+}(1, \theta, \phi, t) \right).$$
(5.35)

更に, wの連続性から,

$$w^{-}(1,\theta,\phi,t) = w^{+}(1,\theta,\phi,t).$$
(5.36)

故に,

$$w_n(1,t) = A_n(t).$$
 (5.37)

が得られる.ここで、 A_{nm} の代わりに、 A_n と表した. $p \ge \partial p/\partial r$ の連続性から、境界 $r = 1 + \epsilon h$ において、 ϵ につい て1次のオーダーの量をとると、

$$p^{-}(1,\theta,\phi,t) = p^{+}(1,\theta,\phi,t),$$
 (5.38)

$$\frac{\partial p^{-}(1,\theta,\phi,t)}{\partial r} = \frac{\partial p^{+}(1,\theta,\phi,t)}{\partial r} - \frac{45}{2}\sin^{2}\theta h(\theta,\phi,t)$$
(5.39)

を得る.上の条件から $rac{\partial p_n^-(1,t)}{\partial r}$ を求めると,

$$\frac{\partial p_n^{-}(1,t)}{\partial r} = -(n+1)p_n^{-}(1,t) + C_n(t), \qquad (5.40)$$

が得られる.ここに、 $C_n(t)$ は、

$$C_{n}(t) = -\frac{3(n-1)(n-m)}{2n-1}v_{n-1}^{-}(1,t) + \frac{3(n+2)(n+m+1)}{2n+3}v_{n+1}^{-}(1,t) + \frac{3}{2}\frac{(3n-1)(n-m)}{2n-1}w_{n-1}^{-}(1,t) + \frac{9(n+2)(n+m+1)}{2n+3}w_{n+1}^{-}(1,t).$$
(5.41)

である. (5.40) 式が,内部領域 Ω_{-} での乱された圧力 p^{-} の展開 係数 p_n についての方程式(即ち,(4.27)) に対する境界条件で ある.ここで,原点での圧力の一意性から, $p^{-}(0,t) = 0$ と置く と,これらの条件を満足する(4.27) 式の解は,

$$p_{n}(r,t) = \frac{C_{n}(t)}{2n+1}r^{n} + \frac{r^{n}}{2n+1}\int_{1}^{r}r^{-(n-1)}f_{n}(r,t)dr - \frac{r^{(n+1)}}{2n+1}\int_{0}^{r}r^{n+2}f_{n}(r,t)dr \qquad (5.42)$$

と求めることができる.以上から、領域 Ω^- での乱された圧力 p^- が求められる.

6 数值計算

渦に撹乱を与えた後, t > 0 での 渦表面の形 $h(\theta, \phi, t)$ は (5.35) 式から

$$h(\theta,\phi,t) = -\frac{2}{15} \sum_{n=m}^{\infty} (v_n(1,t) - w_n(1,t)) \frac{dP_n^m(z)}{dz} \cos m\phi.$$
(6.43)

で計算できるはずであるが,右辺の級数は [2] によると, $z = \pm 1$ の近くにおいては,非常に収束性が悪いので,ここで別の方法を用いる.

S(t)は同じ流体粒子から構成されるので

$$\frac{D}{Dt}(r-1-\epsilon h(\theta,\phi,t)) = 0, \qquad (6.44)$$

が成り立つ.これより, ϵ について1次のオーダーの量をとれば,

$$\frac{\partial h}{\partial t} = u^{-}(1,\theta,\phi,t) + 3\cos\theta h + \frac{3}{2}\sin\theta\frac{\partial h}{\partial\theta}.$$
(6.45)

が得られる.ここで, (6.45) 式は, 形式的には (6.43) 式と等価 である.本論文では,

$$u^{-}(1,\theta,\phi,t) = \sum_{n=m}^{\infty} u_n(1,t) P_n^m(\cos\theta) \cos m\phi.$$
(6.46)

によって与えられる数値解 $u^{-}(1, \theta, \phi, t)$ を用いて偏微分方程式 (6.45) 式を数値積分することによって $h(\theta, \phi, t)$ を求めることに する.

これから3次元的な微小撹乱の場合の数値結果を出す前に, Moffatt と Moore による軸対称的な撹乱の場合の数値結果を述べる. 論文 [1] によると 撹乱を加えた後の表面の形 $h(\theta, t)$ を次のよう に与える.

$$h = -\frac{1}{5} - 2A_2(t)\mu + \frac{1}{20}\operatorname{sech}^2\tau \sum_{n=3}^{\infty} \frac{(2n+1)^2}{n(n+1)} (\operatorname{th}\tau)^{n-3} P'_n(\mu)$$
(6.47)
 $\complement \subset \circlearrowright$

$$\frac{(2n+1)^2}{n(n+1)} = 4\left(1 + \frac{1}{4n(n+1)}\right)$$
(6.48)

である. (6.48) 式の左辺は $n \ge 1$ の場合に対し, $\frac{1}{4n(n+1)}$ は小 さいと見なして無視する. この時 (6.47) 式の無限級数は和が求 められて

$$h = -\frac{1}{5} - 2A_2(t)\mu + \frac{\operatorname{cosech}^2 \tau}{5 \operatorname{th} \tau} \frac{d}{d\mu} \sum_{n=3}^{\infty} (\operatorname{th} \tau)^n P_n(\mu)$$

= $-\frac{1}{5} - 2A_2(t)\mu + 1/5 \operatorname{cosech}^2 \tau [(1 - 2\mu \operatorname{th} \tau + \operatorname{th}^2 \tau)^{-3/2} - 1 - 3\mu \operatorname{th} \tau]$ (6.49)

となる.ここで, $\mu = \cos(\theta), \tau = 3/4t$ である. (6.49) 式は Moffatt と Moore の近似的な解析解である. 彼れらはこの式から数値結 果を出した. (6.47) 式は (6.43) 式に相当する.

S(t)は同じ流体粒子から構成されるので $h(\theta, t)$ を求めてくれば次の式

$$\frac{\partial h}{\partial t} = -\frac{3}{2} \frac{\partial}{\partial \mu} [(1-\mu^2)h] + \sum_{n=1}^{\infty} A_n n(n+1) P_n(\mu), \qquad (6.50)$$

が得る. (6.50) 式が (6.45) 式に相当する. A_n は次の方程式を 満す.

$$\frac{dA_n}{dt} = 3\frac{n-1}{2n+1} \left[\frac{n(n-3)}{2n-1}A_{n-1} - \frac{(n+1)(n+2)}{2n+3}A_{n+1}\right]$$

$$(n = 1, 2, ...)$$

次に (6.49) 式と (6.50) 式から数値結果を出して比較して見る. 3 次元的な微小撹乱と軸対称的な微小撹乱の場合の u_n, v_n, w_n と A_n に対する発展方程式はn について閉じていないので,これを 数値積分するには n > N 無視して閉じた方程式系にしなければ ならない.ここでは軸対称的な撹乱の場合は N = 50,100,150,200とし、3 次元的な撹乱の場合は N = 150,350,550,750 とした.ま た,r については $0 \le r \le 1$ を 160 等分した差分式を用いた.時 間積分は 4 次の Runge-Kutta 法を適用した.

図1はm = 0, N = 50の場合の表面の形 $h(\theta, t)$ の時間発展 (t = 3, 4)の様子を示す. $\theta = 0$ は後部淀み点に対応する. 図1 は式 (6.49)から出した. t = 0で与えられた撹乱が時間と共に後 部淀み点付近で Moffatt-Moore が言った spike の形が確かに現わ れている事が分かる.

図2はm = 0, N = 50, t = 2.5の場合の(6.49)式と(6.50)式から 計算した数値解 $h(\theta, t)$ の比較した様子を示す. $\theta = 0$ は後部淀み 点に, $\theta = 180$ は前部淀み点に対応する.図2でN = 50, t = 2.5の時に二つ式から出た解はほぼ同じように見えるが.前部淀み 点付近で(6.49)の解は少しずれている事がわかる.これは(6.50) から出た解と(6.49)から出た解は前部淀み点付近で一致しない ことである.または,(6.50)式の解はN = 50, t = 2.5の場合で は前部淀み点付近では収束が遅い.

次に前部淀み点付近でm = 0, N = 50, 100, 150, 200, t = 2.5の場合を考える.

図2で (6.49) 式の解は前部淀み点付近だけでずれていること が分かったが.それで,前部淀み点付近で図を $5\pi/6 \le \theta \le \pi$ の間で拡大して見る. これは図3に示す. これによると同じ時間(t = 2.5)では N の数が大きくなるほど (6.50)式の解と (6.49)式の解は前部淀み点付近で一致する. 特に, N = 200の場 合二つの解はほぼ一致する. 上の議論によるとわれわれの考え方 ((6.50)式)から解を求めるためには発展方程式の展開の項数を 十分に取らなければならないということが分かった.

3次元的な撹乱の場合は解を (6.45) 式から求める. 図4 は m = 2, N = 750 としたときの初期撹乱に対する $\phi = 0$ の渦断面の表面 の形 $h(\theta, 0, t)$ の時間発展 (t = 0, 0.5, 1.0) の様子を示す. ここで 任意の方位角 ϕ における渦断面の表面の形 $h(\theta, \phi, t)$ を知るため には, 図に表す各々の曲線に $\cos m\phi$ を掛ければよい. この図か ら,初期に与えた撹乱は,時間の経過と共に後流側へ向かって流 されて行き,後部淀み点へ近づくに連れて,撹乱のピークは次第 に増大していく様子がわかる. $h(\theta, 0, t) = h(\theta, \pi, t), h(\theta, \pi/2, t) =$ $h(\theta, 3\pi/2, t) = -h(\theta, 0, t)$ が成り立つ事から,時間の経過と共に, 後部淀み点付近のの部分から渦度を持つ流体が外部の渦無しの 流れの中へ流出すると,各々の部分から回転軸の回りに π だけ 回転した部分では,逆に,渦無しの流体が渦領域の内部へ流入す る. これは Moffatt と Moore が述べた spike に対応する構造が, 後部淀み点の回りから現れてくることになる.

図 5 は m = 2, N = 150, 350, 550, 750, t = 1.0 の場合の (6.45) 式 から計算した数値解 $h(\theta, \phi, t)$ の様子を示す.後部淀み点付近で数 値解は $N \ge 0$ によらずほぼ一致する.前部淀み点付近で解はずれ ている様に見える.それで,前部淀み点付近で図を $5\pi/6 \le \theta \le \pi$ の間で拡大して見る.これを図 6 に示す,これによると同じ時間 (t = 1.0) では N の数が大きくなるほど (6.45) 式の解は前部淀 み点付近で 0 に近づいていくことが分かる.特に, N = 750 の 場合の (6.50) 式の解はほぼ安定な流れに収束している.

上の結論からいうと、時間の経過と共に後部淀み点 ($\theta = 0$)の 回りから、m = 2の場合は二ヶ所に、Moffatt と Moore が述べた spike に対応する構造が現われてくる様子が見られた.前回 [2]の 結果ではm = 2の場合は前部淀み点($\theta = \Pi$)付近から、不安定性 が現われると思われたが、上の計算結果から、これは展開の項数 が少な過ぎための数値誤差で項数を増やすと安定な流れに収束し た. $m \ge 3$ でも原理的には同様に計算できる.m = 3,4に対する 試験的な計算結果では、方位数m = 3,4のどちらの場合におい ても、撹乱を加えた後の渦表面の変化の傾向m = 2と似ている。 時間の経過と共に後部淀み点($\theta = 0$)の回りから、m = 3の場合 は三ヶ所に、m = 4の場合は四ヶ所に、それぞれ spike に対応す る構造が現われてくる.m = 3,4の場合は前部淀み点($\theta = \Pi$)付 近で、安定な流れに収束させるために、上の展開の項数をm = 2の展開の場合の項数より沢山取らなければならないようである.

参考文献

- [1] Moffatt, H.K. and D.W.Moore, J.Fluid Mech. 87(1978)749
- [2] Akio Fukuyu, Tashpulat Rozi and Akimitsu Kanai. Journal of the Physical Society of Japan Vol. 63, No. 2, February, 1994, pp. 510-527



図2. (6.66) 式と (6.67) 式から計算した数値解hの比較.



図 4. (6.62) 式に対する渦表面の形 h の時間発展の様子.

図6.図4の前部淀み点の近くにおける渦の応答hの様子.